

ハートビート

作：二瓶佳子

警備員	スタッフD	山本レネ	モ	マイコ	東条一成	ペペロン	AYUMI	リュウヤ	嘉手納梨花	TAMA	リック	司会	スタッフO	女生徒2	女生徒1	コチ1	スタッフB	教師	バレエ講師	スタッフA	奥瀬加奈子(30)	ヒロト(20)	相沢亜希子(47)	唐沢柊斗(19)	小野寺美雪(35)	遠藤真白(17)	宇津木瑠花(17)	今宮春奈(17)	相沢ひかり(17)
	審査員	審査員	審査員	審査員	審査員	審査員	審査員	審査員	審査員	審査員	審査員						中目黒スタジオスタッフ		リンクのスタッフ	瑠花のマネージャー	俳優、ダンサー	ひかりの母	ダンサー	リンクの講師	高校二年生	高校二年生	高校二年生	高校二年生	

【登場人物表】

○B・
レオタードで踊る少女たち。
バレエ講師が檄を飛ばしている。
難しい技術を難なくクリアしていく少女たち。
部屋の隅の椅子に、制服姿の相沢ひかり（17）と相沢亜希子（47）が座っている。
亜希子「厳しい表情のひかり。」
ひかり「亜希子の方を見ないで答えるひかり。」
ひかり「うん」
厳しい表情のひかり。
踊る少女たちのトゥシューズを見て、目を逸らす。

○B・
扉を閉めて、出てくるひかりと亜希子。
浮かない表情のひかり。
歩き出す。
亜希子「コンクール常連の子がちらほらいたね」
ひかり「・・・うん」
亜希子「硬い表情のひかり。」
ひかり「トウシューズ、まだ怖い？」
亜希子「怪我してから、履けなくなっちゃったね」
道を歩く二人。
ひかり「あんなに毎日履いていたのに」
ひかり「ひかりを見る亜希子。」
ひかり「どうしても、怖い」
亜希子「ひかり、こぶしを握る。」
亜希子「い？」
ひかり「ひかり、亜希子を見る。」
亜希子「あの子どもたちは、プロを目指しているんでしょ？それにひかりだって来年大学受験だし。まったく、こんなタイミンでパパが東京に転勤になっちゃった」

亜希子 「でも大学受験にはちょうど良かったかもね」

ひかり 「・・・受験か」

亜希子 「明日から新しい学校でしょ？転校生としては、四月のタイミングでよかったね」

ひかり 「・・・うん」

歩く二人。

○カフェ・テラス席（夕）

川を見下ろすテラス席。

ひかりが座っている。

亜希子がカフェラテを持って戻ってくる。

亜希子 「ここ来てみたかったんだよね。私も久しぶりの東京だから、すっかりおのぼりさんだよ。はいカフェラテ」

ひかり 「ありがとう」

カフェラテを飲む。

視線の先に、川の向こうの建物。薄暗くなってきたている周囲。建物の中が光ってよく見える。ぼんやり見えているひかり。

ひかり 「あ、あそこ、ダンス教室だ」

川の向こうの建物の室内がよく見えている。

若い男女が大勢集まって、踊り出している。

ひかり、立ち上がって、テラスの淵まで行き、その教室をよく見る。

亜希子 「へー、あんなところにダンス教室があるのね」

亜希子、スマホでマップから教室の情報を見る。

亜希子 「リンクダンススタジオだっけ」

亜希子 「食い入るように、教室を見るひかり。教室内の動きに合わせて、体をうごかすひかり。」

亜希子 「ひかり？」

振り返るひかり。

ひかり「ママ、あそこ見学に行きたい。今から見学できないかな」

スマホを持ったままの亜希子、驚いた表情。

亜希子「今から？」

困惑した顔の亜希子。

亜希子「電話、してみるか」

スマホを操作する亜希子。
教室を見るひかり。

○リンクダンススタジオ・外観（夜）

コンクリート造りのおしゃれな建物。

警備員が一人。

少年少女が入りしている。

ひかり、ダンスウェアの子達をすれ違
いざまに見る。

○リンクダンススタジオ・内（夜）

スタツフA（30）に連れられて、廊
下を歩いているひかりと亜希子。

スタツフA「今からのタイミングですと、ど
の教室も入れません。あ、今日はオーデ

ィションをやっているかもしれません」

ひかり「オーディション？」

スタツフA「弊社は芸能事務所がやっている
ダンススタジオです。時々ダンスサ

ーの依頼が来るんです。今日は確か、
3のバックダンサーで、内容はジャズ

ダンスだったかと」

亜希子「へえ。すごいねえ」

スタツフA「こちらです。この教室は、中学
生以上のコースです」

扉を開けて教室に入る三人。

○同 教室・内（夜）
スタツフAと、スリッパ姿のひかりと
亜希子が教室の後ろの方から入ってく
る。
生徒たちは前の方に集められている。

小野寺美雪（35）とヒロト（20）
美雪「今回のオーディションは、ジャズ系で
バックダンサー数人、望撮影に使いま
す。メインがヒロト君だから、その後
ろで踊ることになります」
ヒロト、手を振る。
歓声が上がる。
亜希子「あそこにいるの、ヒロト？ すごいね、
亜希子、ひかりにこそつと話しかける。
ひかり「・・・よくわかんないよ」
スタツ「ヒロトさんは、当スタジオ出身
生で、ダンスに歌にドラマにミュージ
カルにひっぱりだこの人気タレントで
すよ！ ダンスボーカルグループクロノ
スのセンターでもあります」
ひかり「すご」
亜希子「東京には本当に芸能人がいるのね」
美雪が振り付けを始める。
全員振りを覚え始める。
ひかりも軽く体を動かして、覚える。
足元はスリッパ。
踊るひかりを見ている亜希子。

○ 同 内（夜）
美雪「では、これから、全員で踊って、次に
進める人を発表していきます」
ひかり、美雪を見ている。
ヒロト、美雪に話しかける。
ヒロト、ひかりを見ている。
美雪「ねえ、その見学の子」
ひかり「わ、わたし？」
美雪「挙動がおかしくなるひかり。
美雪「一緒に踊ってみない？ フリ、覚えてる
でしょ」
腕を組みながらにやにやしているヒロ
ト。
ひかり「ええ？ いや、むりです」
うつむくひかり。

心配そうな亜希子。
ヒロト「ねえ。さっきフリ覚えてたよね。みてたよ。きみ、踊れるでしょ」
ひかり「いやいやいやいや」
ヒロト「ねえ。その足はたんなるガニ股だつて言いたいのか？ ターナンアウトでしょ、それ」
ひかりの足、外向きになっている。
はつと見るひかり。
ヒロト「踊れるのか踊れないのか。こっちにきなよ」
ヒロトに腕を掴まれ、前に連れて行かれる。
足元はスリッパ。
全員が目線がひかりに集中する。
動揺するひかり。
ヒロト「名前と、ダンス歴」
ひかり「ええ」
ヒロト「名前と、ダンス歴」
射るような目線のヒロト。
その目線に、ひかりは腹をくくる。
周囲の人々の目線も、挑戦的な目線。
ひかり「相沢ひかり、クラシック、14年」
堂々と言うひかり。
ざわつく周囲。
14年？ などと言っているのが聞こえる。
ヒロト、ニヤリと笑う。
ひかり「スリッパを脱ぎ、靴下も脱ぐ。やれます！」
ヒロトと美雪、顔を見合わせる。
遠藤真白（17）がジャージを持って歩いてくる。
真白「これ、ジャージ。スカートの下にはきなよ」
ひかり「……ありがとう、名前は？」
真白「真白」

美雪 「おっけー、じゃあ、音楽かけるね」
全員踊り出す。
ひかりも踊る。
亜希子、うれしそうに見ている。
美雪とヒロトが相談しながら見ている。
美雪、手元の書類にメモしながら見ている。
音楽が終わる。

美雪 「呼ばれた人は前に出てきて。それ以外は座っててください。えーっと、颯、健斗、春奈、梨花、条治、瑠花、真白、元気、歩……」
呼ばれた面々の真剣な表情、にやけた表情。

美雪 「……ひかり」
ひかり、顔を上げる。
周りがひかりを見る。
亜希子小さく拍手をしている。
ひかり、前に出ていく。
鏡に向かつて、呼ばれた十人が並ぶ。
ヒロトと美雪が鏡の前に立つ。
呼ばれなかった人たちは、床に座っている。

美雪 「ここから四人に絞るからね。全力で踊って」
真剣な表情の美雪。
ヒロトも真剣な表情。
緊張感のある室内。
音楽がかかる。

全員踊り出す。
ひかりの表情がどんどん良くなっていく。

く。
ひかりが注目を集める。
美雪、ヒロトもひかりを見ている。
踊りが終わる。
美雪とヒロトが相談している。
息が上がっているひかりと他の 9 人。
美雪「じゃあ 10 分休憩。45 分に再開しま
す」
真白「うまいじゃん」
ひかり「へっ？」
瑠花「クラシックって、バレエだよな？私も
春奈「バレエの人は芯がしっかりしたダンス
になりやすいよね。あとひかりさんは、
華がありますね」
ひかり「え・・・」
瑠花「あるね。華。スポドリ飲む？」
ひかり「はにかむひかり」
瑠花「私は瑠花」
春奈「春奈です」
真白「真白。ジャージかしたの私」
ひかり「あ、ありがとうございます。洗って
お返しします」
真白「いいよべつ」
瑠花「通うの？ここ」
ひかり「あ、今日はたまたま見学に来て。川
の向こうのカフェから、この教室が見
えて」
真白「あーあそこね。見えるよね」
ひかり「見えたら、踊りたくなっちゃって。
バレエ教室を探したのに、ここに。
私、長野からパパの転勤で東京に引っ
越してきたばかりで」
春奈「引っ越してきたんですか。高校生です
か？高校はどこに？」
ひかり「あ、用賀高校」
瑠花「用賀？都立用賀？」

真白「瑠花と一緒にじゃん」
ひかり「あ、そうなんだ」
瑠花「何年？」
ひかり「二年」
真白「へえ。この四人、同じ学年だ」
真白「私は、埼玉に住んでいて、埼玉の高校。ここには電車で通ってる」
春奈「私は四大附属の青葉台高です。ひかりさん、ここに通いましょうよ」
瑠花「クラシックに限定せず、いろんなジャンル。の勉強ができるよ。クラシックや、ソフトな柔軟性は強い武器だし」
ひかり「あ・・・うん。うん！通いたい」
美雪「集まってる。暖かく見つめる亜希子。」
美雪とヒロトが戻ってくる。
美雪「集まって」
生徒が集まってくる。
ひかりも後ろの方に集まる。
美雪「ヒロト君と話合って、今度の撮影のバックダンサーをお願いする人を決めました。アサインされた人は、スケジュール等この後事務局から説明を受けてください」
不安な表情のひかり、真白、瑠花、春奈。
美雪「今回は、真白、瑠花、春奈、そしてひかり。この四人でいく」
ひかり「えっ」
真白「やったー」
真白「瑠花、春奈は大喜び。」
美雪「男女混合にするか、どちらかだけにするか、決めてなかったんだけど、バラスを見て、今回は女子四人になりました」
美雪「美雪、ひかりを見る。」
美雪「ひかり、さっきお母さんと話したよ。うちのスタジオでダンスやろう」

ひかり 「真白、瑠花、春奈、ひかりを見る。」

ヒロト 「笑い、世界観がよかった。目を惹きつけられた。これからいるんなジャンルのダンスを覚える必要があるけど、がんばって」

ひかり 「は・・・、ありがとうございます」

振り返ると、亜希子が小さく手をふっている。

ひかり、すがすがしい表情。

裸足の足元は、外向きになっている。

○都立用賀高校・外観（朝）
生徒が登校してきている。

○同 二年三組教室（朝）
クラスが表示。

扉が開く。

ひかりが入っていく。

生徒たちがひかりを見る。

ひかり、目を合わせないように進んでいく。

瑠花 「え、ひかりじゃん」

ひかり 「瑠花が机に座っている。」

ひかり 「出席番号何番？あ、この席だよ」

ひかり 「へ。よかった。同じクラスなんだ。へ。」

瑠花 「ひかり、どうせ私以外全員知らないじゃん」

ひかり 「そうだよ。転校生ですから」

教師が入ってくる。

席に着くひかりと瑠花。

○同 二年三組教室
ひかり、ふと窓の外を見る。

男子生徒が瑠花と話している。

瑠花に告白をしているようだが、話は聞こえない。
瑠花はつまらなそうにしている。
瑠花は身を翻して、その場から立ち去る。

ひかり「瑠花・・・もてるんだ」
「しばらくして、教室の扉が開き、瑠花が入ってくる。
不機嫌そうな瑠花。
瑠花を見ているひかり。」

○同
二年三組教室（夕）
生徒たちが帰り始めている。
ひかり「瑠花、一緒に帰ろう？」
机を片付けている瑠花、ひかりを見上げる。

○道（夕）
歩いているひかりと瑠花。
ひかり「さつきさ、教室からちよつとみえちやつただけど」
ひかりを見る瑠花。
瑠花「ああ、アレね」
歩く二人。

瑠花「なんか、知らない男子に告られた」
ひかり「瑠花、もてるんだね」
瑠花「なんかさあ、なんか、全く知らない男子なんだよ？ 話したこともないの。それで好きとか言われたも、外見しか見えないじゃん。なにそれって思う」
ひかり「外見で好きになってもらえるってよくない？」
瑠花「私が好きとか、何が嫌いとかそういうの全く知らないで好きって言われても、浅くて、無理」
立ち止まる瑠花。
瑠花「私さあ、モデルやってるの」
× × ×
メイクをされる瑠花。
ポーズを決めて、写真を撮られる瑠花。

ひかり 「あ、ありがとう」

ひかり 「ひかり、あ、ありがとう」

要練習です」

裏のリズム、表が得意なのはバレエや

た方がいと思えます。表のリズムと

ます。あと、リズムの取り方を練習し

のくせのようなものが出ることであり

ツクな動きが綺麗です。ただ、バレエ

ひかり 「ひかりさんは、柔軟性のあるダイナミ

春奈 「ひかりさん、早くで話す。」

ひかり 「春奈、ポケットからメモ帳を取り出し、

春奈 「私、大きい舞台・・・というか、こう

いう抜擢、初めてなんです。瑠花さん

や真白さんはよくオーディション通っ

たりして、いるんですけどね。だから、

少しでもうまくなりたくて」

春奈 「私も頑張らないとな」

ひかり 「春奈、私も頑張らないとな」

春奈 「私、大きい舞台・・・というか、こう

ういながら柔軟しているひかり。」

うって思ってる。私が一番出来ないと思

ひかり 「あ、なんか、早めに体を温めておこ

りさん、来るの早いんですね」

春奈 「今日は、用のダンスの振りですから、

すひかり。」

レペットのバッグからスニーカーを出

スニーカーも持ってきてる！」

供はこれ履くんですが。よかった、

バレエやる時とか、男性ダンサーや子

普通の、ダンスシューズです。モダン

ひかり 「これは、これはトウじやないんです。

びくつと、するひかり。」

か？」

春奈 「ふふ。スニーカーで大丈夫ですよ。こ

れってトウシューズっていうやつです

たけど」

ひかり 「ひかりの足元はバレエシューズ。

ひかり「裏のリズム、か。そうかも」

真白「おつかれ」

瑠花「おはよ」

真白「荷物先端に置く二人。」

真白「ひかり、ヨガみたいな格好」

ひかり「よ、ヨガ？」

瑠花「真白、これはバレエだよ。レオタードじゃないだけマシじゃない？」

真白「ゆったりとしたスウェット姿。瑠花、ゆったりとしたジャージ姿。春奈、ゆったりとしたスウェット姿。ひかり、自分の姿を鏡で見る。ぴったりしたシャツにレギンス姿。全員、鏡に映った自分たちを見る。」

真白「あーあ。瑠花とひかりはスタイルいいなあ。私は背も低いし・・・そっちゃんがかったなあ」

春奈「フロアにゴロンと寝転ぶ真白。しゃがむ春奈。顔を見合わせるひかりと瑠花。」

瑠花「背が高く痩せてるひかりと、重心低い方が、ダンスの時パワー出る気がするんだが」

ひかり「ダンスによるよね。ばえる見た目」

真白「アイ字バランスを決めるひかり。」

真白「すご。でも柔軟性も大事だよね」

真白「寝転がったまま柔軟を始める真白。」

真白「私、ダンスで食べていききたいと思ってるんだよね。だから、今回のアサインはチャンスで」

春奈「みんな、この先を決める時期ではあります」

ひかり「ダンスで食べていくか。そうだよね。私がいたバレエの世界だと、バレエで生きていくことを決めた子たちは、中学生くらいから留学したり、国際的なコンクールに出たりしていたなあ」

瑠花「ローザン又とかね。ひかりは？」
 ひかり「わたしは・・・国内のコンクールに
 は出ていたけど・・・でも、ずっと
 バレエしかしていなかった」
 三人、ひかりを見ている。
 ひかり「今ここにいることが、バレエを裏切
 っているような気持ちになってる」
 春奈「どうでしょう。バレエをやっていたか
 ら、それが礎となって今ここにいと
 いう考え方は」
 ひかり「春奈を見る。」
 春奈「なりたいたいものになれる人は、一握り。
 どこかで落としどころを見つけにくい
 のですよ」
 あきらめたような表情の春奈。
 ○同・内
 美雪「美雪が説明をしている。」
 美雪「今回は、ジャズベースで構成します。
 短いけど、よく踊り込んでもらうから
 ね」
 細かく振付をされる。
 美雪「ワン、ツー、スリー、エンフォー、タ
 タタ、タタタ、中途半端に動かない！
 はつきり大きく全身使う！セブエナエ
 イエン」
 全員、真剣に取り組む。
 美雪「ひかり、オンビート、タタ、エンワ
 ンツースリーエンフォー、ハンガー、
 スクエア、バウンスバウンス」
 ひかり「オンビート、タタ」
 美雪「ひかり、スロー！はつきり大きく！」
 必死のひかり。
 × × ×
 踊るひかり。
 苦戦するひかり。
 次第に表情が輝くひかり。

美雪「ひかり、足の甲が伸びてる。そこは伸
 ばさないで」
 ひかり「っ！はい！」
 ひかりの足の甲。
 上下に動かす。
 瑠花「それ、バレエの甲だよね」
 決まりの悪い表情のひかり。
 後ろの扉がしずかに開く。
 バケハを深くかぶったヒロトがのぞき
 ながら入ってくる。
 美雪以外は気づかない。
 美雪はあきれた様子。
 美雪「5分休憩、瑠花、奥瀬マネージャー
 にはスケジュール共有してるけど、た
 ぶん前後にスケジュールあるっぽいこ
 と言ってたから、確認して」
 瑠花「はい」
 見ているひかり。
 瑠花「私、モデルの仕事もリンクでやってる
 の。マネージャーさんついて、ダン
 スの仕事が入ったら融通してもらって
 て」
 ひかり「そうなんだ。ここはダンススタジオ
 兼」
 真白「芸能事務所。ダンスボーカルグループ
 のクロノスとか知らない？クロノスの
 センターが」
 ヒロト「俺」
 ひかり「ひえっ」
 ひかりの顔の横から顔を出すヒロト。
 真白「ヒロトさん！」
 ヒロト「でも最近ドラマとかの方が多くて」
 ひかり、硬直した顔で横を見る。
 ヒロト「ヒロト、いたずらっぽく笑う。
 真白「ヒロトさん？きょう振り一緒ですか？」
 ヒロト「いや、俺は別なんだけど、たまたま
 時間あいたから見に来たの」
 ヒロトとひかりの距離を瑠花はじろり
 と見る。

瑠花「近いです。ヒロトさん」

ヒロト「両手を挙げておどけるヒロト。」

真白「えー、ヒロトさん一緒に振りやります？」

ヒロト「笑ったまま、ひかりを見る。」

ヒロト「慣れた？うちのスタジオ」

ひかり「ひかり、きよるきよるする。」

ヒロト「わたくしですか？」

ひかり「ひかり」

ヒロト「名前……」

ヒロト「俺もさ。子供のころバレエやってたの。結構みっちり。姉ちゃんもやってたから」

ひかり「足首を外側に向け、バレエのポジションをとる。」

ヒロト「ひかり、ほんとは？」

ひかり「動きがわかるって、バレエやってた子のバレエを踊って見せるヒロト。」

ひかり「ひかり、バレエの仕草で手を差し出す。」

ひかり「あ」

ひかり「ひかり、手を引く。」

ヒロト「引かれた手を、ぐっと引き寄せるヒロト。」

ヒロト「ひかりとヒロトの体が近い。」

ヒロト「ひかり、ひかりを見据える。」

ヒロト「ひかりは、目を引くよ。なんでだろう」

ヒロト「う」

ヒロト「イラつく瑠花。」

ヒロト「瑠花、ひかりをヒロトから、引き離す。」

ヒロト「ヒロトさん、暇なんですか。今ドラマの撮影期間じゃないんですか。今ドラマの撮影期間じゃないんですか。」

春奈「春奈メモを取り出す。」

春奈「今は来期のドラマと、映画の撮影期間中のはずですね。あと舞台の稽古中で」

ヒロト「もありません」

ヒロト「よく知ってるのな」

美雪「三人から距離を取るヒロト。」

美雪「ヒロト、あんたは別で振り付けると聞いてたけど？」

ヒロト「知っている。っていうか俺振りなんて一時間もあれば完璧なんだけど」

真白「うちらだつて振り入れるだけならもつと早いですよ」

美雪「君たちは、振り入れて、精度を上げないといけないんだから。練習あるのみ。」

ヒロト「ヒロト、邪魔するなら出てって」

ヒロト「へいへい。ちよつと覗いただけだからさ」

手をひらひらさせて出ていくヒロト。

美雪「ため息をつく。」

真白「ヒロトさんかっこいいなあ」

春奈「今人気急上昇の若手俳優ですからね」

ひかり、横目でヒロトを追う。

瑠花、ひかりを見ている。

○リンクダンススタジオ・外観（夜）

建物から出てくるひかり、瑠花、真白、春奈。

真白「あーっ、つかれたねー」

瑠花「足がパンパン」

春奈「アミノ酸とか用意しないとだめですね。疲労回復」

ひかり「ついていくのに精いっぱい。バレエのクセを消さなきゃって意識すると、足がちがち」

疲れた様子。

建物から唐沢柊斗（19）が出てくる。

柊斗「真白」

振り返る真白。

真白「柊斗！今帰り？一緒に帰ろうよ」

柊斗「うん」

ひかり、瑠花、春奈、柊斗を見る。

真白「彼氏の柊斗。今度発足するリンクのダ

ンスチームに入る予定なんだ。柊斗、
こちらと一緒にオーディション通った、
ひかりと春奈と」
柊斗「瑠花ちゃんだよ。モデルの」
瑠花「眉間にしわ。
真白、柊斗を見る。
柊斗「あわてて。
柊斗「いや、有名だからさ。リンクでモデル
やってる子だと、今一番仕事あるんじゃない？」
真白「もう帰る。じゃあうちらはここで。い
くよ！」
柊斗を引っ張っていく真白。
ゆるゆると手を振る三人。
瑠花「不機嫌そうな表情。
ひかり「真白、彼氏とかいるんだね、なん
かすごい。東京って感じ」
春奈「あの方、柊斗さん、たしかダンス大会
でいつも上位ですよ。しかもダンス大会
でできる方です。真白さんも上手です
から、いいカップルですね」
瑠花「ばかばかしい。カフェ寄っていきようよ」
春奈「あ、私もこれで。この後塾なので」
ひかり「塾！今から？くたくたなのにな？」
瑠花「春奈の家は受験ガチだもんね」
春奈「はは。おにぎり食べて頑張ります」
ファイティングポーズで去っていく春
奈。
顔を見合わせるひかりと瑠花。
二人、歩き出す。
ひかり「恋に受験にモデル活動に。同い年な
のに、なんか別世界だなあ。私がのん
びりしすぎてるのかな。これまでバレ
エのことしか考えてなかったから」
瑠花「ひかりは、恋人はいなかったの？長野
の時間」
ひかり「私、女子高で。全然。田舎ですと
バレエだけやってたかんじ。今は大学

には行けって言われてるから、長野に
いてもどのみち受験や進学で東京にき
いてたかもしれないな」
瑠花「ふーん。うちの高校、指定校推薦結構
あるから、選ばなければ大学には行け
ると思うよ。でも上位校を選ぶなら、
ある程度塾とかで底上げしないとけ
ないかも」
ひかり「そうなんだ。実はバレーばかりやっ
ていたから大学受験をするという発想
がなかったんだよね。だから仕組みが
全然わからない」
苦笑いのひかり。
瑠花「ひかりを見る。
ひかり「本当は海外にバレーで留学とか考え
てたんだ」
つとめて明るく話すひかり。
瑠花「なんで、今バレーから離れたの？離れ
て良かったの？」
ひかり「ありきたりだけど、怪我しちゃっ
て。・・・怪我自体はもうなおったん
だけど」
うつむくひかり。
ひかり「トウシューズが、怖くなってしまっ
て」
瑠花「うつむきながら話すひかり。
顔を上げて、明るい調子で。
ひかり「瑠花は？告られたりとかしてたじゃ
ん？」
瑠花「私・・・私は、・・・いいなと思う人
はいるよ」
ちらつとひかりを見る瑠花。
ひかり「うらやましい。そういう気持ち、私
も持ちたいなあ」
歩きながら踊りだすひかり。
ひかりをまぶしそうに見る瑠花。
瑠花「マネージャーには、高校卒業したら、
モデルの仕事に本腰入れて、あと演技
も勉強して俳優の仕事もやったらいい

と言われているんだよね」

瑠花「でも、本当はダンスやりたい。私も踊りたい」
暗い道で踊りだす二人。

○中目黒スタジオ・外観
中目黒スタジオのプレート。

○同・控室・内

控室の扉に、瑠花、ひかり、春奈、真白の名前が張られている。
中には、四人が衣装に着替えてそれぞれ振付の確認をしている。
真白は手鏡でメイクを見ている。
真白「メイクも練習しなきゃなあ。メイクさんなになにに使ってるのか後で聞いとかなきゃ」

ひかり「バレエだと舞台メイクだから参考に
ならなかったな」

春奈「これも舞台メイクみたいな感じですよ。
普通のメイクではありませんね」

瑠花「メイクなんて、撮影でしてるから普段
する気にならないな」

スタッフB「お疲れ様です。そろそろスタジオ
ノックをしてスタッフB入ってくる。
オに移動していただきたいのですが、
ご準備いかがでしょうか」

全員顔を見合わせる。

ひかり「大丈夫です」
スタッフB「では、行きましょうか。ご案内
します」
全員緊張した様子で、控室を出る。

○同・スタジオ

廊下の先の扉を開けると、そこには
巨大な白いロールスクリーン。
ライトが当たっていてまぶしい。
スタッフB「瑠花さん、ひかりさん、春奈さ
ん、真白さんです。よろしくお願いし

ます！」
スタッフ声を張る。
その場にいる全員が、四人を見る。
ひかり、全員の視線を感じる。
口々によろしくお願いしますと言いな
がら、ライトの当たる場所に歩いてい
く。
スタッフ「続きまして、メインのヒロトさ
んです、よろしくお願いします！」
ヒロトが衣装を着て、入ってくる。
ヒロト「ヒロトです。よろしくお願ひします」
方々に挨拶しながら入ってくるヒロト。
ライトの当たる場所にヒロトが立つ。
ひかり「よろしくおねがします！」
ヒロト「緊張してるでしょ」
ヒロト「ヒロトを見つめるひかり」
ヒロト「主役は俺。ミスっても、ひかりの分
くらいカバーできる」
ひかり「ミスらないよ」
強気な返答。
ヒロト、にやりと笑い、配置につく。
ライトが当たっている。
美雪もいる。
まぶしい光。
決意に満ちた表情のひかり。
× × ×
全員で踊る。
主役のヒロト。
ダイナミックな溜花。
正確な春奈。
スタイルのある真白。
華のある、目立つひかり。
○同・控室・内
四人が疲れ切った様子で戻ってくる。
真白「つかれたー」
春奈「撮影というのが大変であるということ

がわかりました。もう限界です」
ソファになだれこむ春奈。
それぞれ椅子に座る。
奥瀬加奈子（30）が入ってくる。
加奈子「瑠花、よかったよ！みんなもおつかれさま」
瑠花「奥瀬さんもおつかれさまでした。ひかり、奥瀬さんは私のマネージャーさんなの」
加奈子「あなたが最近リンクに入ったひかりさんね。さっきのダンス見てたよ。単刀直入に言うけど、リンクモデルズに所属しない？リンクダンススタジオは、リンクスっていう芸能事務所の運営しているダンススタジオなんだけど、モデルズに特化した部門がリンクモデルズなの」
瑠花「わたしも、リンクモデルズ所属」
加奈子「瑠花、ひかりさんいけるとおもったんじゃない？モデルズに」
瑠花「おもったけど」
加奈子「いい子がいたら教えてって言ったよね」
おどける瑠花。
ぽかんとするひかり。
真白「奥瀬さん、あの、私もモデルやりたいんですけど。背、低いけど、何かできないですか。ダンスが一番だけど、とにかく芸能で食べていきたいんです」
真白を見る加奈子。
真剣な表情の真白。
加奈子「真白ちゃん、真白ちゃんは、ダンスで成果を出して、ある程度仕事を選べるようになると思ったらモデルをやったらいいと思うの」
真白「スタイル悪いからですか」
加奈子「加奈子と瑠花、顔を見合わせる。ヨンに合った体型ってというのがあって、

美醜や個人の好みではなくて、このバ
ランス、ポディタイプの間を必要と
している場所って感じかな」
春奈「まあ、そういうのはありますよね」
真白「スタイル悪いってことでしょ」
加奈子「ちがうよ。そうじゃなくて、そのポ
ディタイプはモデルのフィードとフ
イツトしないってこと」
加奈子「悲しい顔になる真白。」
加奈子「真白ちゃん、真白ちゃんはまだ自分
のミリの範囲の事しか見えてないか
もしれないけど、真白ちゃんは魅力的
だよ」
瑠花「でも、モデル体型ではない」
瑠花をにらむ真白。
真白「真白、ため息。」
真白「アクトのクラスも行ってると、演技
は手応え難しくて」
加奈子「困惑顔の加奈子。」
加奈子「いろんな役があるから、真白ちゃん
が合う役もあるかもしれない。がんば
って」
真白「真白、俯く。」
真白「帰る。お疲れ様」
ひかり「荷物を持って走って出ていく。」
ひかり「真白は、モデルとかやりたかったん
だね」
春奈「たしかに、ダイエツトしたり、メイク
を工夫したりずっと鏡見てましたね」
瑠花「才能のない人が努力をしているのを見
ているのが辛い・・ね」
春奈「なんですかそれ。こわ。私も帰ります。
この後勉強しないといけないので」
ひかり「この日も勉強なの？」
春奈「もちろん。うちが上位大学合格必須な
んです。おさきです」
春奈も出ていく。
険しい表情の瑠花。
加奈子「ひかりちゃん、瑠花を車で送ってい

○リンクダンススタジオ・内（夜）
レッスンで踊っている人々。
コーチ「十分に休憩で」
タオルで汗を拭く人、スポドリを飲む人。
ひかりもスポドリを飲む。
ふと見ると、真白が床に座ってスマホを見ている。
ひかり「真白。来てたんだ」
ひかりを見上げる真白。
悲しげな表情。
ひかり「真白？」
真白「ひかり、またオーディションだめだった」
ため息とともに、バッグにスマホを投げる。
ひかり「オーディション？」
瑠花「またダメだったの？」
真白「はあ、ダンスは自信あったんだけどなあ」
ひかり「ダンスのオーディション？なんのオーディション？」
春奈「オーディション？春奈が来る。」
春奈「アイドルグループですよ。昨今、Kポップの流行もあって、女性ダンスグループのオーディションが盛んなんです」
瑠花「リンクも、グループ作って売り出したりはあるんだよね」
真白の横に座る春奈。
春奈「真白さんの横に座る春奈。真白さんの横に座る春奈は何だと思いませんか」
真白「うー、顔とスタイル。ビジュ！」
瑠花「全部じゃん」
春奈「敗因の分析は重要ですよ。真白さんの場合、強みはダンスなのは間違いありません。敗因をどう補完するかですか」

ね
ひかり、少し考える。
ひかり「ねえ、うちら四人でグループやる？」
ひかり「全員ひかりを見る。」
ひかり「私、歌ったりとかそういうのはよくわからぬけど、そこに」
廊下を指さす。

○同・廊下
掲示板上。
紙でポスターやお知らせが貼ってある。
「ダンスデュエル2025」のポスター。
それを指さすひかり。
ひかり「ダンスの大会かな。面白そうだなって思ってたの」
全員、顔を見合わせる。
真白「これ、審査員の面々やばくない」
瑠花「今年からやるんだ」
春奈「勝ち上がったらテレビに出れるんですね」
春奈「スマホで写真を撮る。」
ひかり「視聴者投票もあると」
瑠花「スマホで検索する。」
瑠花「上位の決勝のみテレビ放送、でも予選は全部動画で流して、ファン投票もあるんだって」
春奈「となると、事前にSNSでファンを作っておくとか、戦略が必要ですね」
ひかり「ひかり、全員を見る。」
ひかり「おもしろそうかなって」
ひかり「この四人の、ガールズグループとかどうか。まずダンスで名前を売る。」
その先はそれぞれ展開すればいいかんじで」
瑠花「マネージャーに聞いてみる。どうせ在学中は好きにさせてもらえると思うけど」
春奈「受験さえ滞りなければ、うちは放任主

しょう？あなたは、もう、自分の商品なのよ。他の子達は、まだ違うから、好きなことができるのよ」
悲しい表情の瑠花。

○リン クダンススタジオ・練習室・内（夜）

大人数のレッスン。
暗い表情の瑠花。

真白 「瑠花！デュエルのダンスだけどさ・・」
目を合わせない瑠花。

真白 「瑠花・・？」
真白を無視して行ってしまう。

ひかり 「その様子を見ていたひかり。
あれ、瑠花、どうかした？」

真白 「無視された」
真白に話しかける。

ひかり 「え？」
真白、怒りの形相。

真白 「無視！された！なにあれ。なんなの？
は？無理！」

春奈 「春奈がやってくる。
どうしたんですか？」

真白 「真白、行ってしまおう。」
真白、行ってしまおう。

○同・ エントランス（夜）
荷物を持って出てくる瑠花。

ひかり 「瑠花、硬い表情。
瑠花、立ち止まる。」

振り向くと、ひかり、少し後ろに春奈
と春奈に手を引かれた真白。

真白は瑠花を見ていない。

ひかり 「どうしたの？」
瑠花 「・・別に」

春奈 「瑠花さん、瑠花さんは理由もなく無視
したりしないですよ。なにかあった

真白 「私が、なにか、瑠花を傷つけた？」
ひかり 「瑠花？」

瑠花 「だめになった」

瑠花「目に涙を溜める瑠花。」
瑠花「ダンスデュエル、だめになった。奥瀬さんに、許可できないって言われた！涙を溜めた目で、みんなを見る瑠花。」
ひかり「シヨックを受ける一同。」
ひかり「なんで？」
瑠花「涙を溜めて悔しそうな顔の瑠花。」
瑠花「私のキャリアに不要だからって言われて」
春奈「なんですかそれ」
真白「真白、シヨックを受けた表情。」
瑠花「私だって、出たい。私は、ビジュだけじゃなくて、ダンスも上手いんだって、ビジュ以外を」
拳を握りしめる瑠花。
瑠花「私は私を表現したい」
全員「全員、つらい表情。」
リズムモデルズ・会議室
瑠花、ひかり、真白、春奈、奥瀬に頭を下げる。
全員「おねがいます！」
困った表情の加奈子。
真白「瑠花が必要なんです」
瑠花、真白を見る。
加奈子「うーん、あのね、瑠花はみんなと違ってもう知名度あるのよ。だから、遊びの大会でハマするわけにはいかないの」
瑠花「へましません。お願いします奥瀬さん」
春奈「お願いします」
ひかり「お願いします」
加奈子「お願いします」
用しよう、なんて考えてないよね」
顔色が変わる真白と春奈。
瑠花「私、見た目で評価するモデル業が、本当はいやで。中身を見てもらいたくて。ダンスで評価されれば、見た目だけじゃないって思える。自分に自信が持てると思うんです」

加奈子「逆に自信喪失したらどうするの？」
ひかり「させません。結果、出します」
瑠花「私、自分に自信が欲しい。モデル以外で」
加奈子「呆れた表情の加奈子。持たざる者だわ」
加奈子「真白を見る加奈子。わかった、じゃあ、大会終わったら、ひかり、モデルズに所属してね」
ひかり「え？わたしですか？」
加奈子「私にはあなたを諦めてないの」
ひかり「私を見据えたあと、瑠花を見る加奈子。」
加奈子「無様な結果は出さないこと。SNSは慎重に対応すること。SNSに私生活は出さないこと。ダンスのこと限定でね。悩んだら私に連絡してね」
につこり笑う加奈子。
喜ぶ四人。

○ファーストフード店・内
ひかり「ひかりが来る。」
春奈「春奈、スマホを見る。」
ひかり「真白さん瑠花さんも間も無くくるかと」
ひかり「勉強、大丈夫？」
春奈「顔を上げる春奈。」
春奈「大丈夫、と、言いたいところですが、勉強はやっぱ物理的な時間が必要な部分もあります。うまくスケジューリングをやりくりするしかないですね」
春奈「ポテトを食べる。」
ひかり「座る。」
春奈「うちは、いい意味でも悪い意味でも私に無関心なんですよ。両親の最大の関心事は大学受験です」
ひかり「親も兄弟も高学歴？」
春奈「兄二人は東大です。親戚のだれだれが

どこの大とか、いとこの誰かはバカ大に
行ったとか、そういう話ばかり。だから
ら、うちの上位大に入らないと人権
ないんですよ。異常ですよ。ね」
ひかり「ダンスのことはなんて？」
春奈「父親は、勉強はできるけど運動はでき
なくて、辛い思いをしたように、運動
はできた方がいいくらい感じですね。」
ひかり「運動・・・」
春奈「あと両親太っている、それを気に
して運動をつけさせているというイ
メージです」
ひかり「エクササイズなのね」
春奈「リンクは、家からも学校からも近いで
すから、特別なところに通っていると
思っていないんですよ。うちの両親は」
ひかり「この間のヒロトさんの足の扱いは？」
春奈「そういうこともあるから、扱いが
です。ヒロトさんを知らないし。ダン
ススクールのコネかな、集団の中の一
人かなくらい」
ひかり「天をおおぐ春奈。」
ひかり「まあ、確かにコネではあるけど。大
学でダンスは続ける？サークルとかそ
ういうの」
春奈「続けますよ。続けます」
ひかり「ひかりを見る春奈。」
春奈「社会人になっても、歳をとっても、続
けます。好きなんですよ、自分が進化
していく感じが。表現したい動きがば
ちつと決まる感じが。こうなりたいっ
ていう目標がいて、それに近づく努力
ができる感じが」
ひかり「・・・わかるよ」
春奈「ダンスを続けるためにも、成績は落と
さないで、受験もパスする。ダンスは
勉強の妨げになつていないことを、証
明しなくてはならない。ダンスを続け
たいから」

春奈「でも、微笑み。ひかり、できればダンスで客観的な成果が欲しいですね。両親にも理解できるような、圧倒的な評価が」

ひかり「それが、ダンスデュエルか」

春奈「渡りに船といいますが、ま、そういうことです」

笑うひかり。

笑う春奈。

ひかり「あ、きたきた」

瑠花と真白がやってくる。

○ファーストフード店・内

春奈「四人、着席している。」

春奈「それでは、作戦会議を行います」

ひかり、瑠花、真白、真剣な表情。

春奈「まず初めに、私たちのグループ名を決めたいと思います。私が考えたのはこちら」

紙にカラーペンで「三石」と書いてある。

春奈「ムールと読みます」

ひかり「ムール」

瑠花「ムール貝？」

真白「むしろ、はるな、ひかり、るか？」

春奈「そうです！それぞれの頭文字を並べ替えました。いろいろなパターンを検討しました結果、一番かわいいかなとおもうものにしました」

どやる春奈。

春奈「新しい名称を作るときは、意味のなさそうな言葉に意味を与えるので、耳馴染み無くても、いづれ慣れます」

ひかり「なるほど」

瑠花「どんなグループ名も、第三者的には結構そのまま受け入れるもんね」

真白「シンブルでいい気がする」

ひかり「ムール、ムール」

瑠花「ムール」

全員「ムール！」

顔を合わせる全員。

春奈 「では、ムールの戦略です。まず、SNS
展開。デュエルは上位のみ地上波放送
です。下位に関しては、ウェブ配信に
なります。それに対して視聴者のリア
クシヨンも重要になります。ダンスは
もちろんですが、私たちのファンにな
ってもらうことが重要と考えます」

瑠花 「いいねの数みたいなかんじ？」

春奈 「そうですね。私たちは高校生であ
りますし、顔出しのリスクもあります」

瑠花 「私は芸能活動してるから、そもそも顔
出してるけど」

春奈 「瑠花さんがすでに人気のモデルである
というのが強いファクターとして作用
します。奥瀬さんには釘をさされてい
ますが、使わない手はありません」

ひかり 「私たちは知名度ゼロの素人だもんね。
でも、私バレーエのアカウント持ってる。
ほぼ死んでるけどね」

春奈 「別ア作りましょう」

真白 「私は、顔も名前も出していいと思って
るよ。どのみちダンスで食べていきたく
いから、切り離せない。一応アカウン
トもある」

春奈 「私はエックスのみアカウントがありま
す。ツイ廃と言われて久しいですから」

ひかり 「ツイ廃」

瑠花 「すごいね」

真白 「ツイ廃？」

春奈 「ツイッター廃人です。文字で、どん
どん更新されていく世界と、私の親和
性が高くて、ついずーっとみてしまっ
んですよ」

ひかり 「抵抗がないってことかな」

瑠花 「私、文字読むのがそもそも苦手」

真白 「わかる！動画とかの方がいいよね」

春奈 「うなずきあう瑠花と真白」

春奈 「私は別アカウントを運用していきます。
SNS

ファンがつくように、最初は瑠花さんと絡めて、ハッシュタグをつけて裾野を広げる」

ひかり「内容はどんな感じ？」

春奈「最初は、ダンスと、あとビジュの盛れた写真系でアイドル風にしましょう。踊ってみた系とかいいですね。スタジオで、スマホで撮影しましょうか」

○リンクスタジオ・練習室・内

春奈「かわい練習着のひかり、瑠花、真白、メイクに余念がない。

春奈「今日は、流行りのダンスを撮りましょう。センターは瑠花さんとひかりさん、左右に私と真白さんです」

真白「センターがいいなあ」

春奈「最初は目を引くために、瑠花さんを使うのです」

瑠花「使う・・・」

苦笑いの瑠花。

スマホに三脚をつけて、カメラを設定する春奈。

× × ×

映像を確認する春奈。

(映像) 瑠花がカメラに寄るところから始まり、後ろに下がると四人がいる。四人で流行のダンスを踊り出す。

最後に決めポーズ。(終)

春奈「うん、オツケーです。これをまず投稿していきます」

真白「ダンスなら全員得意だから、流行りのダンスでもなんでも、すぐに覚えられし、踊れるね」

ひかり「えーん、私音の取り方とか、まだ苦手なんだよ真白」

ひかり「踊りながら真白に助けを求めろ。

真白「体で覚えるんだよ体で。ひかりは姿勢がいいけど、姿勢がいいだけじゃ表現

に幅が出ないから、もっと力抜いて、オンビートと16ビートの切り替えがへたくそ」

指導する真白。

真白 「ワンエンツ―エンスリーエン、タタタ」
ひかりと真白、踊る。

持参したノートパソコンで、動画を編集する春奈。

春奈 「このために編集の勉強をしたんですよ。これがなかなか面白くて」

作業をする春奈。

春奈 「これを送りますから、瑠花さん、アツプしてください。その際、メンバーのアカウントも紐付けして」

瑠花 「おっけー」

瑠花 「スマホをいじる瑠花。」

瑠花 「こんなかんじ？」

春奈 「はい」

春奈 「はい」

（瑠花のSMS）踊ってみたよ！#

mashiro # hikari # haruna # ダンス

ユエル 2025 # MTR

瑠花 「投稿」

○同・廊下

自動販売機でスポドリを買うひかり。

後ろから声をかけられる。

ヒロト 「ねえ」

ふりかえるひかり。

ヒロト 「近い。」

ひかり 「はっ、ヒロトさん？」

ヒロト 「ねえ。ダンスデュエルにエントリー

したんだって？あの3人の四人で」

ひかり 「あ、はい。なんで知って・・・」

ヒロト 「だって俺、出るんだよねー。ダンス

デュエル」

ひかり 「出るんですか？」

ヒロト 「勘違いしないで。俺、ゲストだから。

クロノスで出るの。クロノスのバツク

に、リンクのダンサーも何人か出るよ」

ひかり「そうなんだ」
ヒロト「リンクも、積極的なのは歓迎してるから、ひかりたちのエントリーは好意的だよ。美雪先生が振り付けしてくれてるって言ったよね」
ひかり「そうなんですよ。出るって言ったなら協力してくれて」
ヒロト「ひかりは、なんか目を引くから。協力したくなるんだよ」
ひかり「目を引く？」
ヒロト「大事なことだよ。高校卒業後はどうするの？芸能？」
ひかり「いや、私なんかそんな、そんなこと考えてないです。大学に行って、ダンスはできれば続けたいなっていうか」
ヒロト「もつたいたい」
ひかり「え？」
ヒロト「あのね、あのオーディションで、大学のひかりを引きずりこんだのは、なんだかわかってないよね？」
ひかり「な、なんで？ですか？」
ひかり「ため息をつくヒロト。」
ヒロト「ひかりと目を合わせないで言う。目をみはるひかり。」
ヒロト「ひかりと目を合わせるヒロト。」
ヒロト「輝いてたから。手前で踊ってる子供達より、目が吸い寄せられた。一人だけ光ってるみたいだった」

○（回想）同・教室・内（夜）
美雪が全員に振り付けをしている。
美雪を見ながら全員踊っている。
つまらなそうに見ているヒロト。
ヒロト、ふと、目が壁際にいるひかりに向く。
ひかりは振り付けを、ちいさくおどつている。
足元はスリッパ。

ヒロトの目は、ひかりをとらえる。
ひかりの表情、動き、じっと見つめる
ヒロト。
ひかり、集中して、さりげなくふりを
覚えている。
真剣な目で見つめるヒロト。
ひかりから、目が離せないヒロト。
ひかりが、周りから浮き上がってるよ
うな、輝いて見える。

○同・廊下

顔が赤くなるひかり。

ヒロト「つまり、人をひきつける才能がある
んだよ。こっち側の人間だよ。ひかり」

ひかり「こっち側・・・。溜花のマネーじゃ
ーさんに、モデルズに誘われた」

ヒロト「ほら！ やっぱりそうじゃん」

ヒロト「ヒロト、口元をかくして笑う。」

ヒロト「俺、見る目あるわー」

ヒロト「ひかり、驚く。」

ヒロト「楽しみにしてるよ。ひかり。・・・

連絡先教えて」

ハグしたままスマホを出すヒロト。

ぼーっとしてしまっているひかり。

ヒロト「ひかり？」

ひかり「えっ、あ、はい」

スマホを出すひかり。

物陰から、溜花が見ている。

溜花「ちやらい」

溜花、立ち去る。

○用賀 高校・外観（朝）

校門に生徒が入っていく。

ひかりも徒歩で入っていく。

○同・二年三組教室

机を片付けているひかり。

女生徒1「ねえねえ、声をかけてくる。」

女生徒1「ねえねえ、ヒロトの目の後ろで踊

瑠花「あ、ごめん」
無言で歩き出す二人。
瑠花「あんまり、心配そうな顔。」
ひかり「静かに聞いているの。苦手です。私」
瑠花「ダンスとかあると、友達になれるんだ
けど、そうじゃないと、モデルだから
声かけてくれるのかなとか、モデル
と仲良くして誰かに自慢したいのかな
とか、思っちゃって」
ひかり「瑠花・・・」
瑠花「なんか、壁作っちゃって、うまく友達
ができないくて。ひかりや春奈や真白は
別だよ。一緒にまっていう仕事をした
し」
無言で歩く二人。
ひかり「んー、嫌なこと、いっぱいあったん
だね瑠花」
ひかり「ひかりを見る瑠花。」
ひかり「変だったね」
瑠花「ひかり」
ひかり「瑠花は、最初からそうだったわけじ
やないよね。傷つけられるから、嫌に
なっちゃったんだよね。わかるよ。だ
って一緒に踊ってるし、仲間じゃん」
泣きそうな表情の瑠花。
瑠花「まだ、知り合ってた間もないけど、私に
とっては、三才のメンバ―とは、結構
濃厚な付き合いをしていると思ってる」
ひかり「それ、私もそう思う」
瑠花「顔を合わせた二人。」
ひかり「よかった」
ひかり「それは私もそうかも。長野の友達と
離れたのは悲しかったけど、世界が広
がったし、今はそれについていくのに
一杯だし、時間がすごく早く感じる
よ」
目の前には夕焼け。

二人、目を細めて夕焼けを見る。
瑠花、夕焼けを見ているひかりを見て
いる。

○リンクスタジオ・練習室・内（夜）

全員練習着でダンスの練習をしている。
その様子を撮影している春奈。

メールの音がする。
スマホでメールを確認する春奈。

春奈「あっ」

三人、春奈を見る。

春奈「デュエルの事務局からメールだ」

全員顔色が変わる。

ひかり「動画審査の合否？」

瑠花「うわー、お願いします！お願ひします」

真白「受かっているでしょ。絶対大丈夫」

春奈、メールを開く。

春奈、読む。

春奈「は・・・通ってる」

ひかり口を抑えて驚きの表情。

瑠花、驚きの表情でひかりを見る。

真白「よっしゃ！きたこれ！さすが三才！」

春奈「よかつた・・・ははは」

ひかり「えー、うれしい」

瑠花「よかつた」

それぞれが、体を動かして喜ぶ。

春奈「これで、次は、動画撮影が入っての大

会予選です。スケジュールは後ほど共

有しますので、それまでに演目の練習

を頑張りましょう」

全員締まった表情。

真白「うー、楽しみ」

ひかり「練習しなきゃ」

瑠花「スケジュール奥瀬さんに確認しないと」

スマホをいじる瑠花。

決意の表情で柔軟をするひかり。

真白、自撮りをする。

ひかり、瑠花、春奈も映り込む、全員

の写真。

○ ひかりの部屋（夜）
ベットに横たわり、スマホを見ている
ひかり。SMSの投稿を検索している。
ひかり 「瑠花ちゃん、フォロワー多いなあ。
いいねも多い」
ゴロゴロしながら見ている。
スマホの画面にメッセージが来る。
ひかり 「えっ！」
画面には、ヒロトの文字。
ひかり 「ヒロトさん。」
（ヒロトメッセージ）動画審査通った
んだって？おめでとう。
可愛いスタンプ。
ひかり、挙動不審になりながら、返信
を打つ。
（ひかりメッセージ）ありがとうございます
います。よく知ってますね。
すぐに返信が来る。
（ヒロトメッセージ）SMS見てるから。
俺、裏アカでひかりをフォローしてる
よ。ひかりも俺をフォローしてよ。公
式と裏両方。
かわいいスタンプ。
ひかり 「えっえっ」
（ひかりメッセージ）そうだったんで
すね。やってみます。
かわいいスタンプ。
ひかり 「ヒロトさん、見てくれてるんだ」
ベットから起き上がり、スマホを見る
ひかり。
ひかり 「クロノスのフォロワーをしたらいいの
かな？検索で、クロノス、クロノ
ス・・ん？」
スマホ上には、クロノスのヒロト、熱
愛、共演女優と深夜の密会などのニュ
ースが上がってくる。
硬直するひかり。
無表情になる。
ベットにスマホを置く。

部屋から出ていく。

○リンクダンススタジオ・練習室・内（夜）

真白「ワンスの練習をするひかりと真白。」

ひかり「オンビートで」

うなずくひかり。

真白「バウンスして、セブエナエイエン」

真剣な表情。

うまく踊れない部分がある。

何度もやり直している。

見ている真白。

真白「ひかり、もっと重心を落として」

お手本を見せる真白。

無言でうなずくひかり。

また踊り出す。

真白「ひかり」

踊り続けるひかり。

真白「ひかり」

真白「ひかり、ひかりの肩を持つ。」

真白「ひかり、ぶっ通しだよ。休憩しよう。」

怪我しちゃうよ」

汗をぬぐうひかり。

ひかり「うなずく。」

ひかり「床にすわて、俯いている。」

真白「ひかり、床にすわて、俯いている。」

真白「どうした？今日、なんか辛そうだよ。」

何かあった？」

辛そうな顔で、真白を見るひかり。

ひかり「わからないの」

ひかり「ひかりを見る真白。」

ひかり「自分がどう思っている、どうしたい

のか、よくわからないの。でも、もや

もやすくの」

真白「ひかりの隣に座る。」

ひかり「みんな、どうしているのかなあ。こん

な気持ち、抱えて生きていけないよ。」

苦しい。こんな気持ち、知らなかった」

うつむくひかり。

真白「床を見ている。」

真白「なんか、難しいよね。何に悩んでいるのか知らないし、言わなくてもいいけど、なんていうか、うちらは表現者なんだよね」

真白「心の、細かい感情のヒダを知る必要があると思ってる。繊細な感情、揺れ動く感情。水の波紋のように」

ウエーブする真白。

真白「うまく言えないけど、もやもやして苦しいかもしれないけど、その思いを経験したことは、ダンサーである以上、ラッキーなことかもよ」

ひかり「ラッキーなこと？」

真白「うなづく」

真白「増幅された感情で、ダンスの表現が豊かになると、言われたことがあるよ」

ひかり「・・・バレエって、本当に感情を乗せるダンスで。例えば有名なジゼルっていう演目の、主人公ジゼルって、アルブレヒトに裏切られて、死んでしまっただよ」

ひかり「悲しみ、憎しみがってジゼルの踊る。乗せて、踊るの」

真白「糧にしよう。ひかり」

真白「立ち上がる。少し泣く。その感情を乗せて、ジゼルの踊る。」

○ファーストフード・内（夜）

まばらな店内。

ひかり、瑠花、春奈、真白が揃っている。

春奈「予選会ですが、審査員10人で、一人100点を持ち点。千点満点になりません。あとはライブで見ている視聴者のよいねの数。敗者が復活に利用されるよ

うです。私たちの予選グループは、2
0組で、上位5組敗者復活1組が決勝
に行きます」

ひかり「6組」

瑠花「結構、怖いね」

春奈「そもそも動画審査に通ってる人たちだ
から、当然上手だと思うんだよね」

春奈「SMS上にも、動画通ったとか、予選グ
ループのことかを発信している人た
ちがいて、その人たちの動画を見てみ
たけど、うまいよ」

ひかり「そういうの見えるんだ。見たい見た
い」

スマホを見るひかり。

顔色の悪い真白。

テーブルには、各自のハンバーガーや
ポテト。

食べながら話をしている、春奈、ひか
り、瑠花。

ひかり「瑠花が悪くなっている真白。
の？」

瑠花「ボディライン出る撮影の時だけ気にし
てるけど、食事制限はあんまりしない
かな」

気持ちが悪くなっている真白。

ポテトを食べているひかりの口元。

ひかり「ポテトおいしい。私たちダンスでか
なり運動しているから、それほど太ら
なくない？」

気持ちが悪くなっている真白。

春奈「食バーガーを食べる春奈。
んが、うちには両親も兄も太っているの
で、気をつけていますよ」

ポテトが悪くなっている真白。

ひかり「春奈は小柄で華奢だから、太るとか

想像つかないね」
ナゲットを食べる瑠花。
瑠花「親の体型にばっちり影響受けるからね。
奥瀬さんが、スカウトする時親の体型
見られて言ってた」
気持ちが悪くなっている真白。
真白「う・ちよつとごめん」
トイレにかけこむ真白。
ひかり「三人、ぽかんとトイレの方向を見る。
う」
瑠花「具合悪そうだったね」
春奈「全然食べてないです」
真白のトレイには、手がつけられてい
ないポテトとドリンク。
○同・トイレ・内（夜）
ひかり「トイレに真白の様子を見にい
くひかり。
閉まっている個室をたたきひかり。
吐いているような声。
ひかり「真白？」
水を流す音。
真白「青い顔の真白が出てくる。
ごめん、大丈夫」
手を洗う真白。
心配そうな顔のひかり。
ひかり「具合悪い？早く帰ろうか」
うつむく真白。
○同・内（夜）
顔色の悪い真白が戻ってくる。
その後をひかりが付いてくる。
瑠花「大丈夫？具合悪い？」
うつむく真白。
春奈「体調悪いようでしたら、はやく
帰られ
たほうが。迎えにきてもらったりし
ま
すか？」
うつむく真白。
真白「気持ち悪くなってる」

真白 「ハンドタオルを口に当てる真白。最近生理来てないんだよね」

瑠花 「アプリーで管理してないの？」

真白 「面倒で・・・私あんまり規則的じゃないから、いつが最後だったか」

春奈 「真白さんは、柊斗さんと・・・そうか。彼氏ということは、そういうこともあるということなんです。恥ずかしいながら、私は子供っぽいのか、そのような発想がありませんでした」

ひかり 「私も。想像つかない」

瑠花 「無責任だよ。真白」

瑠花 「無責任じゃない？デュエルどうするの？なんで今なの？」

瑠花 「怒り出す瑠花。」

瑠花 「ねえ、わかっている？三才の発端は真白でもあるんだよ？」

真白 「具合の悪そうな真白。」

真白 「セックスするなって言ってるんじゃないから。避妊しろよって話」

真白 「ジュースを飲む瑠花。」

真白 「オーデイション受からなくて、スカウトもされなくて、望んだ結果が全く出なかった時に、誰にも求められてないんだって思った時に」

真白 「険しい表情の春奈。険しい表情のひかり。険しい表情の真白。」

真白 「柊斗は優しくしてくれて」

真白 「誰にも求められない自分に、優しくしてくれて」

ひかり 「真白・・・」

春奈 「顔を背ける瑠花。」

春奈 「恋愛をしたことない私ですが、真白さんと柊斗さんのカップル、いいなあっ

て思ってたよ」
春奈 「ポテトを食べる春奈。」
春奈 「柊斗さん、バランズいいですよね。ダンスの。昔からよく大会とかで上位成績ですしね。真白さんのスタイルあるダンスと通じるところがあるというか」
真白 「柊斗のダンス、好きだったの」
瑠花 「まず、柊斗君と話し合いなよ」
ひかり 「いや、まず、本当に妊娠かどうか調べたらどうかなあ」
ひかり 「全員ひかりを見る。」
ひかり 「生理不順なんですよ？わからなくない？」
真白 「啞然とする真白。」
真白 「そう・・・だね」
春奈 「瑠花さんはアプリで管理してるんですか？何使ってます？」
瑠花 「私の場合、肌荒れするんだけど、モデルに差し支えると困るから、体温計と連動してるやつを使ってる」
スマホを見せ合う瑠花と春奈。
○リンクダンススタジオ・練習室・内。
真白 「ひかり、瑠花、春奈、真白がいる。呆れた顔の瑠花。」
笑顔をひかり。
困った顔の春奈。
ひかり 「胃腸炎でよかったよ」
瑠花 「人騒がせな」
春奈 「胃腸炎はきついんですよ」
真白 「あ、の、後、なんとか家に帰ったら、吐くわ、下すわで、三日位寝込みました。あ、腕がなまってる」
瑠花 「柊斗君には？」
真白 「気まずいかな？」

真白「あの後、泣きながら電話して、大騒ぎ
しました」

呆れる瑠花。
苦笑いの春奈。

真白「でも、私も柊斗も、一瞬でも現実に直
面して、気持ち引き締まったという
か、これからは気をつけなくてはなら
ないって思い直したってどうか」

瑠花「当たり前だからね」
真白「はい」

スマホを見ているひかり。
メッセーjを見ている。

(ヒロトメッセーj)なんで返事くれ
ないの？
(ヒロトメッセーj)ねえ

泣いてるスタンプ。

浮かない表情のひかり。

ひかりを見ている瑠花。

春奈「さあ、練習しましょう。日がないです
からね」
手を叩く春奈。

○臨海スタジオ・練習ホール・内

様々な衣装を着た人々が、ダンスの練
習をしている。

本番用衣装を着たひかり、瑠花、春奈、
真白がいる。

春奈「私たちの出番は17番目です。まだ時
間ありますから、振りの確認しましよ
う」

奇抜な衣装や、奇抜な化粧の人々。
それらを見て圧倒されるひかり。

ひかり「なんか、すごい」
真白「ひかり、うちらも負けてないよ」

瑠花「そうだよ」
春奈「隣の芝生は青いってやつですよ」
ひかり「バレエのコンテストしか出したことな

かったから」
周囲を見渡すひかり。

ひかり「面白いね。いろんな人がいて」
笑顔になるひかり。
両手を広げて、回るひかり。

○同・本番ステージ

豪華なセットが組まれている。

向かいあったテーブルに十人の審査員。
舞台袖から見ているひかり、瑠花、春奈、真白。

真白「審査員のメンツがえぐい」

春奈「えぐえぐですね。全員有名ダンサーです」

瑠花「写真撮ってもらいたい」

ひかり「そうなの？」

全員ひかりを見る。

春奈「そっか。ひかりさんは、知らないですよね」

真白「一番気楽じゃん」

瑠花「はあ、緊張する」

ひかり「緊張はわたしもするよー」

ライトの当たるスタジオ。

前の出番のグループが踊っている。

ひかり「でも、楽しいね」

笑顔のひかり。

スタッフ「三才の皆様、スタンバイお願いします。合図をしたら舞台にお願いします」

全員「はい！」

ひかり、瑠花、春奈、真白、それぞれ
の緊張感のある表情。

スタッフ「お願いします！」

○同・本番ステージ

煌めくライト。

全員立ち位置に立つ。

音楽が始まる。

真剣な表情で踊り出す。

揃うダンス。

スタイルのある真白のソロ。

キラのある瑠花のソロ。

正確な技術の春奈のソロ。
楽しくなっているひかり。
ひかり、満面の笑みでソロを踊る。
煌めくひかり。
音楽が終わる。
やり切った表情のひかり。
ライトが煌めいている。

○同・本番ステージ

モニターに、順位が表示されている。
いいねの数はタイムリーに増えていく。
三石はステージ上で採点を待っている。

司会「若さあふれる庄巻のステージでした。
審査員のリックさん、いかがでしたよ
うか」

リック「すごいスタイルあるダンスでした。
音楽性が高くて、ちゃんと拾ってて、
クオリティ高かったです。真白ちゃん、
キッズの頃から知ってるけど、うまく
なっただね。他のメンバーもばちばちき
まっただね！」
真白、口元を抑えて喜ぶ。
ひかり、瑠花、顔を合わせて喜ぶ。
春奈、ぴよんぴよん飛んでいる。
司会「それでは三石、採点をお願いします！」
リック「100」

HAMA「99」

嘉手納梨花「98」

リュウヤ「99」

AYUMI「98」

ペペロン「96」

東条一成「98」

マイコ「100」

R「98」

山本レネ「99」

司会「合計、985点！高得点だ！満点が二
人です！」

顔を合わせる三石。

司会「順位は——！」
モニターに順位画面。

三石のバーが、上に上がっていく。
険しい表情のひかり。
祈るポーズの瑠花。
口を手で抑えている真白。
拳をにぎりしめる春奈。
三石のバーが上から三番目で止まる。
司会「2位です！後3組です。1位2位は
決勝出場が確定しました！」
ギヤー！と、声をあげて大喜びする。
ぴよんぴよん飛び跳ねる。
笑顔のひかり。
ひかり「夢みたい！」
笑顔の瑠花。
笑顔の春奈。
笑顔の真白。
モニターの順位画面のなか、三石の
いねの数がどんどん増えていく。
会場の片隅に加奈子の姿。
加奈子「よかったね。三石」
会場から出ていく。
○同・外階段踊り場
ひかり「ママ？ライブ配信見た？通った
よ！二位通過！よかった！うん、う
ん、ありがとう！すぐ帰るね」
通話を切るひかり。
ヒロト「ねえ」
びくつとするひかり。
バケハを目深に被ったヒロト。
ひかり「ヒロトさん」
ヒロト「なんで返信くれないの？今日予選だ
つていうの知ってたからきちやっただ
お茶目に言うヒロト。
ひかり、目を逸らす。
ヒロト「俺何かした？既読スルー怖いんだ
ど」
ヒロト、近寄ってくる。
ひかり、目を合わせない。
ヒロト、目を合わせようとする。

ひかり「だって」
ひかり「ヒロトと目があうひかり。」
ひかり「だって、女優さんと、深夜の密会つて」
ひかり「記事見て・・・」
ヒロト「ああ、あれかあ」
両手で顔を覆うヒロト。
責めるような視線のひかり。
ヒロト「あれはね、ドラマで共演した人で」
手で口元を覆っているヒロト。
ヒロト「一番だよ。宣伝。そういう話があったら」
たほうが、ドラマ自体が話題になるから」
階段に座るヒロト。
ヒロト「ていうか何それ。かわいい。かわいい」
ひかり「・・・番宣」
恥ずかしくなるひかり。
ヒロト「立ち上がってひかりを抱きしめる。」
ヒロト「既読スルーしないで」
ひかり「うん」
ヒロト「記事とかのことは、本人に確認して」
ひかり「うん」
抱擁を解く。
ヒロト「本選出場決定おめでとう」
ひかり「ありがとうございます。決勝で会いましょう！」
ヒロト「俺はゲストダンサーだけどね」
階段の扉が開く。
鬼の形相瑠花。
瑠花「こんなところに！」
ひかりの手を引き、体を引き寄せる。
瑠花「チツ。たらしが」
ヒロト「た・・・たらし？」
瑠花「ひかり、みんな写真撮るよ」
ひかり「うん」
走り去る二人。

残されるヒロト。

○ 臨海 スタジオ・控室・内

扉に「至」と書いてある紙が貼ってある。

中では、柔軟をするひかり。

振りを確認する瑠花。

SMS を更新している春奈。

メイクを直している真白。

春奈 「生放送、今から本番です！ 至 にいい

ねをお願いします！投稿し」

四人の写真と共に、投稿する。

ひかりのスマホ、メッセージが来る。

ひかりがスマホを見る。

（ヒロトメッセージ）がんばれ！応援

してる。

かわいいスタンプ。

笑うひかり。

（ひかりメッセージ）ヒロトさんも、

がんばってください。

かわいいスタンプ。

扉がノックされ、スタッフロ

が入ってくる。

スタッフロ 「お疲れ様です。そろそろ出番で

す。ご移動お願いします」

全員、顔を見合わす。

全員、凛々しい表情。

ひかり 「はい。行きます」

○ 同・決勝ステージ

ステージに立つ四人。

音楽がなり、踊りが始まる。

楽しそうに踊る、瑠花、春奈、真白。

輝くように踊るひかり。

（終）

【参考文献】